

資料

# 新たに公開された周作人檔案文書

——中国第二歴史檔案館所蔵文書より

著者…沈 衛 威

(南京大学中文系教授)

翻訳・解題…小 川 利 康

—

当初、五年間で所蔵する近代作家関連の文献資料の全貌が見通せると考えていたが、それはほんの始まりに過ぎなかった。

私は二〇一七年八月以来、中国第二歴史檔案館に足を運んでいる。この五年間で近代（一九四九年以前の中華民国時期）の学者の未公開書簡八千通余り、作家の未公開書簡三千通余り、未公開手稿（ここでは脱稿済みの手書き原稿を指し、書簡と区別する）、すでに公刊された手稿（例えば朱自清『經典常談』手稿三百三十頁余、朱光潜『詩

一

論』手稿四百四十頁余、老舍『大地龍蛇』手稿一百四頁など）一百種余りを陸続と発掘収集した。同時に私が率いる研究チーム三十名余りは、中国第二歴史檔案館所蔵の近代作家手稿の整理・研究利用プロジェクトに参加した。とりわけ特殊な境遇の作家、旧国民政府や汪精衛（汪兆銘、以下では字の精衛を用いる…訳者）政権下で役職に就いた者については個々に檔案が設けられている。例えば、駐米大使、北京大学校長を務めた胡適、軍事委員会政治部第三庁の庁長（中將）を務めた郭沫若、華北政務委員会教育総署督弁を務めた周作人である。胡適、郭沫若が国民政府の檔案に残した各種原稿、手蹟はいずれも何百枚にもものぼる。このほかに閲覧禁止の資料も近々閲覧公開の資料もある。

私はここで簡単に目下整理中の周作人檔案について紹介したい。

張鉄栄教授が二〇〇〇年四月に署名して惠贈して下さった『周作人年譜』（張菊香、張鉄栄編著、天津人民出版社二〇〇〇年改訂新版）は現在最も權威ある年譜で、周作人檔案の整理で私が拠りどころとする資料である。中国第二歴史檔案館が所蔵する日本軍の中国侵略戦争期間における華北政務委員会の檔案六千四百二十三巻は二〇一六年十二月二十六日に対外公開された（「関連檔案がデジタル化され、館内検索閲覧が可能になった」）。この檔案には日中戦争期に周作人が漢奸政権で役職に就いた歴史事実が詳細に記録されている。とりわけ周が華北政務委員会常務委員として（常務委員会の議事録がすべて残っている）、教育総署督弁を務めた期間の活動も檔案に詳細に記録されている（前後して教育総署督弁に就任した湯爾和、王揖唐、周作人、蘇体仁、王謨、王克敏、文元模には相当な分量の檔案がある）。

周作人関連の檔案は三百巻余りあり、大量の公文書草稿が檔案に残っている。ここでは一部のみ重点的に取りあげ、画像でも示したい（檔案館の規約遵守のため、研究を目的とした部分的な掲載に限定される）。今後文献整理

作業のなかでジャンルごとに分けて専門的に論じてゆきたい。

この檔案が公開されるまで、周作人の漢奸政権での役職就任に関するほとんどの研究論文は、周作人の日記、新聞報道、関係者の回想に依拠していたが、いまや檔案資料の全貌が明らかになり、事実はいっそう明らかになった。特に正確な檔案の記録によつて周作人日記、関連報道、関係者の回想とそれぞれ相互に検証することが可能になった。

檔案は現場状況の再現であり、生の一次史料であり、読めば真相が完全に明らかとなる。そのなかには過去に誰一人知らなかった巧妙な計略も隠されている。これこそ真正の文学と歴史の相互検証であり、理想的な二重証拠法<sup>(1)</sup>でもある。

## 二

一九四〇年十二月十九日、南京汪精衛政権の中央政治委員会第三十一回会議で「周作人を華北政務委員会委員に特任し、あわせて常務委員兼教育総署督弁に指名する」という人事案件が承認された。一九四一年一月一日、周作人は華北政務委員会が転送してきた汪精衛政権の特任状を受け取った。「周作人を華北政務委員会委員に特任し、あわせて常務委員兼教育総署督弁に指名する。右命令する」という内容である。一月四日に周作人は就任し、一九四三年二月八日に周作人は罷免されている。

周作人が漢奸政権に在職していた期間中の政務とは書簡の往還であり、上級機関の官僚には上申書を提出し、部下には指令やコメントを残しているが、少数ながら一部私信も含まれる。教育総署督弁たる彼には専属秘書が付き、秘書が書簡、上申書、指令書を謄写し、公印を押印する。

調査済みの三百巻余の檔案について言えば（今後の整理で新たな文書の発見はありうる）、周作人に関する部分

は、現在公開済みの檔案とフォルダごとの内容に即せば、おおむね五種類に分かれる。

第一類…往復書簡（文書フォルダ各巻に散在）

例…華北政務委員会委員長王揖唐と教育総署督弁周作人との往復書簡。

・王揖唐より一九四二年六月十一日付、周作人宛書簡（檔案には王の書簡草稿あり…省略）

・周作人より一九四二年六月十九日付、王揖唐宛の返信（写真一）。

・董康（字…綬經）より王揖唐宛書簡（檔案に書簡あり、省略）

・王揖唐より一九四二年八月二十二日付の周作人宛書簡（檔案には王の書簡草稿あり…省略）

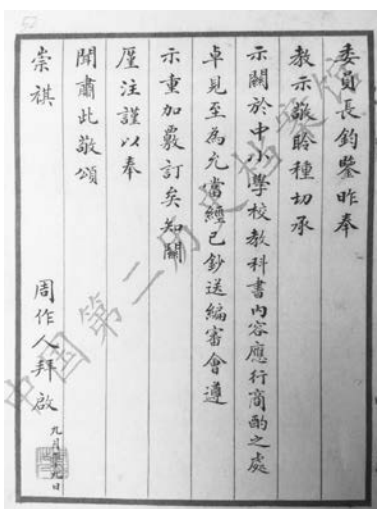
・周作人より一九四二年九月二十九日付の王揖唐宛返書（写真二）

\* 関連する中学・小学校教科書は檔案に詳細な書籍目録が残されている（省略）

\* この件に関する関係者の関連書簡が檔案に残されている（省略）



〔写真一〕



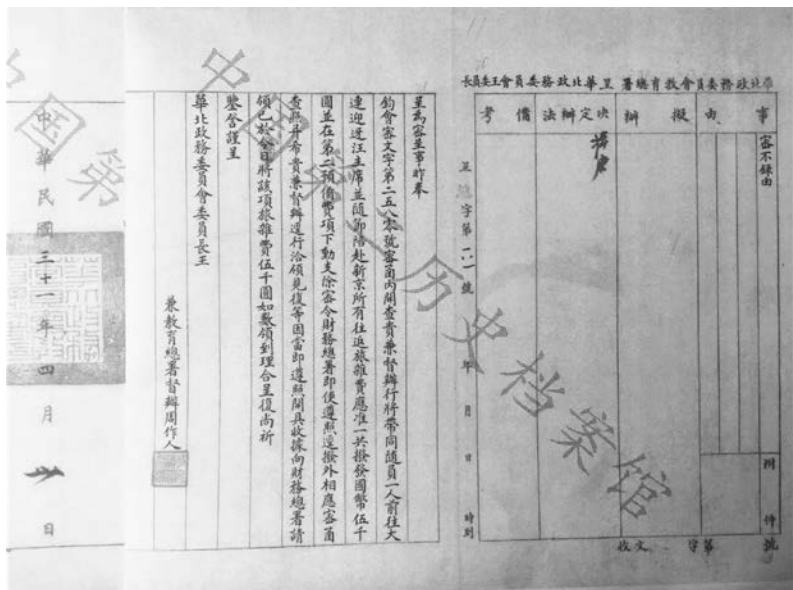
〔写真二〕

第二类…事件の全貌（専用文書フォルダに収納）

例一…一九四二年五月二日～十五日に周作人は汪精衛の大連、長春、南京訪問に同行

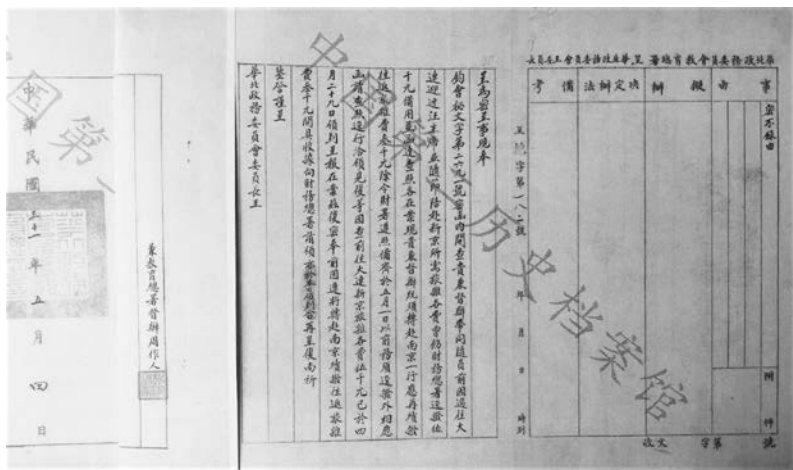
一九四二年四月二十六日の王揖唐からの密書で周作人は華北教育総署督弁として汪精衛に同行して漢奸政權「満州国」新京に赴くよう命じられ（「満州国」成立十年慶賀式典に参加）、その経費査定文書には周作人が一人（教育総署秘書の黄公猷）を伴い、大連で汪精衛を出迎え、新京長春に同行するのに先立ち、四月三十日付で五千元受領した旨の密書がある（「写真三」）。それから周作人は随員を伴って汪精衛とともに南京に戻るため、五月四日付の密書は三千元の旅費雑費を再度受け取ったことを示している（「写真四」）。同じ文書フォルダの文書によると、新京長春に五月七日に到着後、周作人は八日に華北政務委員会委員長王揖唐へ電報を出している（「写真五」）。訪問の行程から費用まで、多くの文書があり、詳細な記録が檔案に含まれている。以前、華北政務委員会教育総署署長の秘書主任の方宗範は一九四〇年七月三日に「抗日鋤奸団」と国民党軍統行動二組との連携による暗殺（未遂）に遭った周作人<sup>(2)</sup>は、今回一九四二年に汪精衛に同行するにあたり、事前準備をすべて極秘裏に進め、行程、資金に関する書簡はすべて密書とされた。公文書送達の「事由」欄には、「密不録由（極秘非公開）」と記されている。周作人が五月二日に大連に向かう道程には、日本の役人も同行し、彼の活動は日本軍の保護のもとにあった。

・四月三十日付の周作人より王揖唐宛書



〔写真三〕

・五月四日付の周作人より王揖唐宛書簡



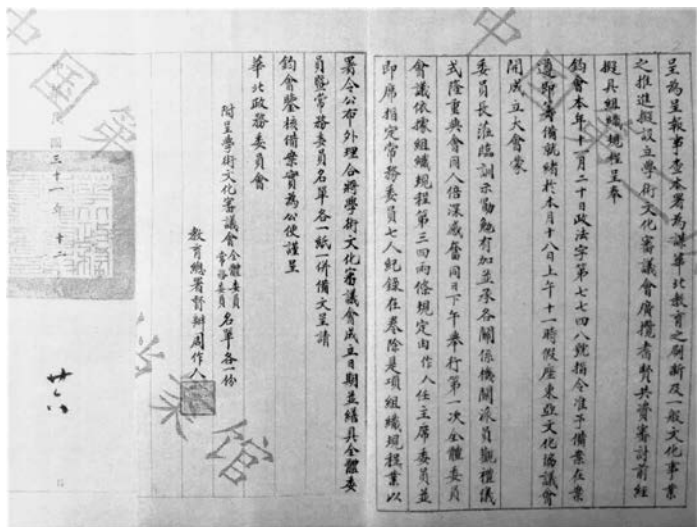
〔写真四〕

・五月八日付の周作人より王揖唐宛の電報



〔写真五〕

・周作人の出張行程の調整に関する王揖唐、財務総署、関係機関の密電、密書、極秘文書のやりとり（省略）



〔写真六〕



〔写真七〕

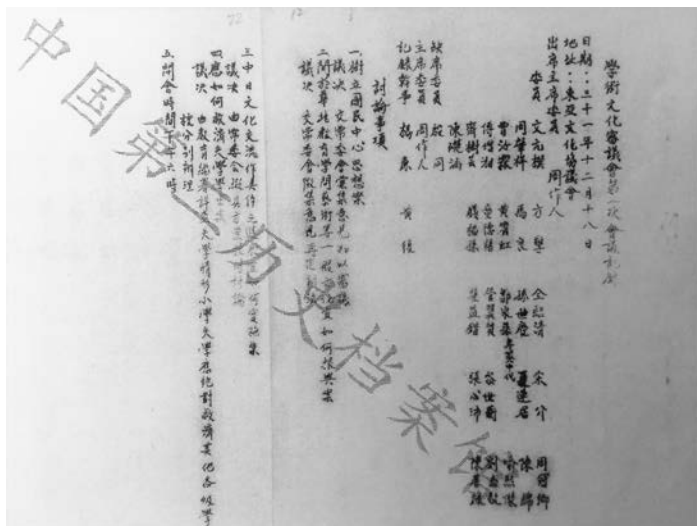
例二…一九四二年十二月十八日、教育総署學術文化審議会の発足と全体委員常務委員の名簿

・周作人は華北政務委員会に教育総署學術文化審議会の発足状況について報告している〔写真六〕。

・周作人は華北政務委員会に全体委員及び常務委員の名簿一部を提出〔写真七〕



・会議の議事録〔写真八〕



〔写真八〕

第三類…日常の政務公文書と関連文書（合巻）

・一九四一年二月十二日、周作人が北京大学のために李盛鐸の蔵書、木犀軒コレクション<sup>(3)</sup>を検収した報告書、蔵書目録（省略）

・一九四二年一月十日、周作人が北京大学図書館を接収した経過状況並びに迅速に予算を調達して再開にこぎ着けた事由を報告（省略）

・一九四二年二月十一日、周作人が北京大学図書館組織大綱草案及び予算書各一通を提出（省略）

第四類…周作人、華北政務委員会常務委員として常務委員会に出席ならびに討論決議した議事録（専用の文書フォルダ）。時間、場所、参加者、議案、決議について詳細な記録がある（写真九）。

第五類…周作人と淪陷期の北京大学、北京市政府、各学術団体（例えば東亜文化協会）及び各総署の関連する人事で交わされた文書あるいは関与した関連する活動記録（合巻）

この種の煩雑な事柄にかかる公文書、私的文書、さらに関連する会合宴会は、檔案のなかに分類項目が立てられ、それぞれ記載がある。

〔写真九〕

## 三

周作人が華北政務委員会教育総署督弁に就任した時の月給の実態は以下の通りである。

周作人の華北政務委員会常務委員兼教育総署督弁という職位は、汪精衛の南京政府の特任官である。特任官の一九四一年以前の月俸は八百元だった。華北政務委員の月俸は一九四一年一月から一千二百元となった。委員と各総署長官の公務費（役職手当の一種）<sup>(4)</sup>は毎月三千元であった。周作人はこの公務費を受け取っていた。つまり、「常務委員兼教育総署督弁で三千元」である。檔案のなかで毎月明示されている〔写真十〕。

一九四三年一月より、華北政務委員会委員及び各総署長官の公務費は毎月五千元に引き上げられた。「教育総署督弁（周督弁）五千元」とある。

周作人は二月八日に職を免ぜられ、九日に職を交代したので、二月の公務費は九日分受領した。檔案には「前教育総署督弁（周督弁）一千六百七・一四元。一日より九日まで計九日間」とある。

学術研究、とりわけ人物研究は手間暇かかる仕事の連続で、無駄足を厭わず、くまなく調べねば、見落としが出る。今回東奔西走して檔案を調べた私の仕事と収獲にしても後学の後知恵に過ぎないと考えている。

周作人檔案の発見に即して言えば、関連する歴史の真相が完全に明らかになるとともに、歴史の「現場」から出発し、周作人に対して歴史的にも文学的にも概括叙述をやり直すことが可能になった。学術研究者の発言権は歴史事実の上に成立するものであり、「心理歴史学」〔I・アシモフのSF小説に登場する架空の学問〕による推測や、仮定（歴史は本来仮定を許容しない）は事実真相の前に当然消え去る。自伝や回想録もおののこと当てにならず、およそ五十％程度の信頼性しかない。これは私が檔案で何度も検証して得られた結論である。

例えば一九四一年から一九四二年までの間に周作人の毎月の俸給と公務費で得たのは四千二百元で、一九四三年一月の月俸と公務費は六千二百元で、二月の月俸一千二百元に加えて、九日間の公務費は一六〇七・一四元（当月は二十八日間のため）であった〔写真十一〕。

本會及各總署長官公費	
壬午一月份	
華北政務委員會委員長	一萬元
常務委員兼內務總署督辦	三千元
常務委員兼治安總署督辦	三千元
常務委員兼教育總署督辦	三千元
常務委員兼實業總署督辦	三千元
常務委員兼建設總署督辦	三千元
朱常務委員	三千元
以上共計壹萬壹千元整	

〔写真十〕

委員支	
壬午一月份	
前委員長	一萬二千八百五十九元四角四分
內務總署督辦	七千一百四十九元八角六分
前內務總署督辦	三千二百一十四元一角九分
前教育總署督辦	一千七百八十九元七角一分
前教育總署督辦	三千二百九十二元八角六分
前治安總署督辦	一千六百零五元一角四分
財政總署督辦	五千九百五十九元
實業總署督辦	五千九百五十九元
建設總署督辦	五千九百五十九元
以上共計伍萬九千三百一十一元	

〔写真十一〕

これにより実際の所得金額を周作人の日記と検証することができる。周作人は日中、教育総署督弁の公務に対応し、会議を開き、公文書を上奏したり、発布したり、視察、接待、訪問するなどして、夜も半ば以上は日本の軍と政府の要人や友達との宴会、会食で接待し、とりわけ日本軍将校を宴会で接待したり、日本軍の宴会に出席したが、ほとんどの場合、軍や警察が護衛し、芸者がはべり、酒色の限りを尽くしたといえる。これこそが周作人の二年間

余りの生活の実態だった。

ふだんも公務で出張となれば、別途公務費が付いた。たとえば一九四二年五月二日から十五日まで、周作人は汪精衛の大連、長春、南京訪問に同行し、『周作人年譜』はその活動を詳細に描き出しているが、ここで私は檔案を利用して、その背後の経費支出、連絡方法、隠密の行動計画を明らかにした。資料間の相互検証、補足により、事実はより明確になった。周作人が漢奸政権の職務に就き、中国を侵略する日本軍が支援する傀儡政権にすり寄り、大連、長春、南京への出張十四日間で人民の膏血八千元を得るのを目にしながら、私は同時に一九三七年八月十六日の抗日戦争開始以降、南京国民政府軍事委員会の定める抗日戦士の戦死者の埋葬費一覧表（軍事委員会發布第五五一八五号訓令、規定「埋葬費給与額表」）を目にする。上佐二百元、中佐百五十元、少佐百二十元、大尉八十元、中尉六十元、少尉・准尉四十元、下士官（一、二、三等の公役）二十元、輜重兵（四、五、六等の公役）十五元とある。輜重兵一人の戦死埋葬費は十五元なのだ。

周作人が一九四一年から一九四二年の間、毎月四千二百元得て（二年間で実収十万八百元）、一九四三年一月に六千二百元、二月の月俸が一千二百元で、公務費は一六〇七・一四元である。合計一〇九八〇七・一七元であり、これが少なからぬ額面であることは無論のことだ。周作人が華北政務委員会教育総務署督弁で得た一〇九八〇七・一七元は、前線で七千三百二十人の抗日戦争の輜重兵の同胞が日本軍に殺戮された埋葬費の合計額に等しいといえる。周作人が一九四一年四月に東亜文化協会評議員代表団を率いて日本を訪問した期間、二度にわたって中国を侵略した日本軍の傷病兵士を「慰問」に訪れ、一〇〇〇元を寄付した（『周作人年譜』六一四頁）。

真実を語る檔案資料で、比較によって叙述すれば、事の是非はいっそう明らかになるだろう。

## 解題

小川利康

今回翻訳掲載したのは、南京大学沈衛威教授から託された未発表の資料ノートである。御本人も記されるとおり、中国第二歴史檔案館が二〇一七年六月九日より一般公開されたのに伴い、檔案館所蔵資料の調査を行い、これまで公開されていなかった周作人関連の檔案資料を入手したので、その一部を紹介したいという趣旨で解題者に託された。今回、資料の重要性に鑑み、本誌の紙面をお借りして発表するものである。<sup>(6)</sup> 翻訳にあたっては、著者の執筆意図を忠実に反映するべく努めたが、訳文だけでは意を尽くせぬ部分には注釈や補足を加えた。漢字表記は原則として日本の常用漢字に改めたが、中国語の書名などは煩瑣を避けるため翻訳しなかった。なお、文中の（ ）は著者自身の補足で、〔 〕内に示したのは訳者のものである。

以下では簡単に資料の持つ意味について解題者による評価を述べておきたい。

周作人（一八八五～一九六七）は、中国の学者・日本文化研究者であり、民俗学、ギリシア文学研究など多分野で活躍した。魯迅の弟として知られ、北京大学教授を長年にわたって務めた。近代文学草創期の理論家として活躍したが、日本占領下の北京で教育総署督弁（文科大臣に相当）に就任したため、日本敗戦後の一九四五年十二月、国民党により北京で逮捕され、炮局胡同監獄に収監された後、翌年五月に南京に移送され、老虎橋の首都監獄に収監、同年戦犯裁判で審理を受け、十一月の一審で禁固十四年、十二月の再審で禁固十年の判決を受けた。その後、南京で二年半刑に服したが、国民党政府瓦解後、一九四九年一月に出獄、上海を経由して、北京に戻った。中華人

民共和国成立後は公民権は剥奪されたものの、禁固刑を免れ、翻訳や回想録執筆に従事したが、文革中に迫害死した。今も中国においては文学者としては第一級の評価を受けながらも、戦時中の日本軍への協力による「漢奸」（奸を為す者、売国奴）の汚名は現在もお消えない。今回、沈衛威教授が紹介するのは周作人が教育総署督弁の任にあった、いわゆる淪陷期の檔案で、六十年余の歳月を経て、ようやく公開に至ったものであり、周作人への厳しい指弾は中国では当然のものである。

周作人に関する研究は、同時代に親しく交友のあった松枝茂夫（一九〇五～一九九五）の翻訳と紹介を嚆矢とし、戦後は木山英雄による淪陷期の周作人研究『北京苦住庵記…日中戦争時代の周作人』（筑摩書房一九七八年<sup>(7)</sup>）が突出した成果をあげ、日本人が一貫して研究をリードしてきた。一九八〇年代以降は中国大陸においても徐々に周作人に関する研究資料が整備され、研究者も増えてきたが、周作人の名を冠した学会を開催することは許されず、政治的な制約から今後も開催は望めない。先般二〇一八年、解題者が非力を顧みずに本学において「周作人国際シンポジウム」を二日間に開催したのは如上の事情に由来する（科研費・基盤研究C「周氏兄弟と『新青年』グループ」による開催）。国際シンポジウムは幸いにも大方の賛同を得られ、中国から十五名、日本から十二名、イギリスから一名、計二十八名の参加を得て、二十六本の論文発表が行われた。

国際シンポジウムでの議論内容の総括は簡単ではないが、どの研究者も「事実求是」、すなわち事実に基づいて真実を求めるという姿勢において共通し、周作人の政治的汚点も含め、事実に基づいた冷静な議論が展開され、非常に質の高い研究交流が実現した。

冒頭の基調講演を依頼した作家止庵は、現在最も信頼できる伝記『周作人伝』（山東画報出版社二〇〇九年）の執筆者であり、『周作人訳文全集』（上海人民出版社二〇一八年改訂版）、『周作人自編文集』（北京十月文芸出版社、

全三十六冊、二〇一一―二〇一四年）の校訂編纂に係わった周作人研究の第一人者である。彼が講演の結びに述べた「私たちは歴史の終点に立って、歴史の起点にあった人物に自分たちと同じ認識を持つよう求めることはできない。よしんば彼らに遠い将来への先見性がなかったとしてもだ」という指摘は立錐の余地なく会場を埋めつくした聴衆から満場の拍手をもって迎えられた。<sup>(8)</sup>

今後周作人研究において日中戦争時期に周作人が対日協力政権に関与したことは避けて通れない事実として向き合わねばならない。これは日中間の歴史問題と同様である。日本による侵略戦争が中国の人々に計り知れない損害と苦痛をもたらした事実は国による立場の違いを超えて共有されねばならない。日本は中国東北地方に満州国という傀儡国家を作り、汪精衛を支援して南京に中華民国国民政府（沈教授の文章では「傀儡政権」、「汪偽政権」）を発足させた。その政権傘下の政府機関として、河北省、山東省、山西省と北京、天津、青島市を統治する華北政務委員会も日本の影響下で成立した。周作人は一九四一年一月から一九四三年二月まで、華北政務委員会の教育総署督弁の任にあった。当時の周作人がこのような対日協力をするに至った経緯は木山英雄による研究で詳論されているが、端的に言えば、さまざまな政治的思惑が錯綜するなかで周作人は追い詰められ、あえて自ら犠牲となる覚悟を決めて引き受けた結果が対日協力であったと解題者は考えている。日本人を妻とし、日本人と日本文化を深く愛した中国最高の知性を、日本人は自らの権益のために利用した。もし日本人として誇りを持つならば、その責任に類被りすることはできない。周作人を深く理解し、その文化的、社会的貢献を明らかにし、今後の日中関係の改善に役立てる責任は、現代を生きる私たちに課された使命である。



## 檔案資料の公開状況

今回翻訳紹介する資料は中国第二歴史檔案館所蔵のものである。いわゆる檔案とは沈衛威教授の文中にもみえるとおり、公的機関が作成した書類、文献だけでなく、プライベートな書簡から行政手続書類まですべてを含み、後年の歴史家が歴史書を編纂する上での拠りどころとなる一次史料である。日本語では公文書館とも訳せるが、収録対象はより広い。中国第二歴史檔案館は、中華人民共和国の國家檔案局の管理下にあるが、その前身は国民党政府が一九三六年に設立した中国国民党史編纂委員會（史料陳列館）であり、所蔵する檔案は辛亥革命以来の国民党政府に係わる公文書が中心で、汪精衛政權の公文書も含まれる。中華人民共和国成立後は、一九五一年に中国科学院近代史研究所所属の南京資料整理処として再出発したが、一九六四年四月に國家檔案局傘下の組織に組み込まれ、現行名称となった。所蔵する公文書は二二万余卷、四千五百万件にのぼる。<sup>(9)</sup>中国第二歴史檔案館が所蔵する檔案は大部分が中華民国史関連資料で、これまでも主題別に整理した資料集を多数刊行している。最も網羅的なのは『中華民国史檔案資料匯編』（江蘇人民文学出版社一九七九年）であり、ほかにも南京大虐殺や抗日戦争関連の資料を多数刊行している。汪精衛政權に関しては、中央檔案館、吉林省社会科学院との共編で『汪偽政權』（日本帝国主义侵華檔案資料選編六、中華書局二〇〇四年）などが刊行されているが、いずれも周作人関連の檔案は含まれず、全般的概況をうかがうものに限られ、今回明らかになった周作人関連檔案は、解題者の管見の限りでは初見のものである。

なお、これまで公刊済みの周作人に関連する檔案としては、南京高等裁判所で行われた戦争犯罪の審理記録の抄録『審訊汪偽漢奸筆録』（南京市檔案館編、江蘇古籍出版社一九九二年）がある。裁判での陳述内容を抄録したもので、今回存在が明らかとなった檔案と照合、分析することで、淪陷期の周作人の動静がより詳細に明らかになる

と期待される。率直に言えば、今回公表された資料も全体からすれば九牛の一毛にすぎず、今後の精査が期待される。仄聞するところでは、二〇〇〇年版『周作人年譜』も新訂版が準備中とのことで、今回の存在が明らかになった檔案三百巻余りが反映されることを期待したい。

### 沈衛威教授について

著者の沈衛威教授は一九六二年生まれ、河南省南陽市内郷県大橋郷の人である。笈を負うて河南大学中文系に学び、学部、修士課程を修了、一九八八年には南京大学中文系博士課程に進み、一九九一年には河南大学中文系で教鞭を執った後、二〇〇二年より南京大学中文系に迎えられた。<sup>(10)</sup> 中華民国期を中心とする近代文学研究で幅広い業績を上げ、特に胡適、学衡派の研究で知られる。主要著書として『胡適伝』（河南大学出版社一九八八年初版）、『茅盾伝』（台湾業強出版社一九九一年）、『東北流亡文学史論』（河南人民出版社一九九二年版）、『伝統与現代之間——尋找胡適』（河南大学出版社一九九四年）、『自由守望——胡適派文人引論』（上海文藝出版社一九九七年）、『回眸学衡派——文化保守主義的現代命運』（人民文学出版社一九九九年版）など多数ある。近著の論文「民国部聘教授及其待遇」（『中山大学学报』社会科学版二〇一九年第四期）、「新発現抗戦初期《対日煽動宣伝之意見書》及鹿地亘手書稿本」（『魯迅研究月刊』二〇二一年第十一期）は、いずれも中国第二歴史檔案館での調査を踏まえた精緻な論文である。

### 【注記】

- (1) 王国維が『古史新證』（一九二五年清華大学講義録、一九三四年來薰閣影印刊行）で提唱した考証法で、文献的事実と出土資料による二重の証明を指す。この場合は関係者の記録と檔案とによる二重の検証を指す。

- (2) 周作人は一九三九年元旦朝九時に年賀の客を装って訪れた二人組の男に狙撃されたが、奇跡的に無事だった。だが、同席していた沈啓无は撃たれて負傷し、たまたま門外にいた車夫も撃たれて死亡した。当時すでに『大阪毎日新聞』主催の座談会（更生支那の文化建設を語る）に出席し、対日協力に傾いているとみなされた周作人を亡き者にせんとする抗日テロと目されたが、下手人は逃走し、真相は今日至るも不明である。周作人自身は事件の背後には日本軍関係者がいて、対日協力を要する脅迫ととらえていた。詳細は木山英雄『周作人「対日協力」の顛末…補注「北京苦住庵記」ならびに後日編』（岩波書店二〇〇四年）を参照。
- (3) 李盛鐸（一八五九～一九三七、號は木齋）は清末民初期の政治家、外交官。祖父以来、稀代の藏書家として知られ、藏書楼を「木犀軒」と称した。所蔵していた敦煌写本は一九三六年に京都帝国大学教授羽田亨（西域史学の権威）へ売却されて、日本に渡った。その後戦火を避けるため、出資者だった武田家に移管され、現在は武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵に帰している。李盛鐸の没後、そのほかの蔵書九千三百余种（五万九千余种）は周作人によって一九三九年に北京大学図書館に売却された。その詳細は『北京大学図書館蔵李氏書目』（北京大学図書館一九五六年）に詳しい。そのほか高田時雄「李滂と白堅」李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景——（「敦煌寫本研究年報」二〇〇七年創刊号）、「李滂と白堅（補遺）」（「敦煌寫本研究年報」第三号）が李盛鐸旧蔵本の辿った命運を詳細に論じている。
- (4) 張有徳・何家偉「近代文官特別辦公費問題考」（中華文化論壇二〇一三年五期）によると、清末以来、官僚の給与には月俸のほかに「公費」が役職手当の一種として支給されるようになった。これは厚遇することで収賄を未然に防ぎ、清廉な身分を維持するよう配慮したもので、支給対象は高級官僚に限られた。日中戦争時期、重慶へ難を逃れた国民党政府でも、南京の汪精衛政権も「特別辦公費」もしくは「公費」という名称で支給は続き、戦時中のインフレも影響し、「公費」はうなぎ登りに増加した。現在の中国には存在しない制度であるが、中華民国（国民党）政府機構を引き継いだ台湾には現在も同様の制度が残っている。ここでは、日本語における「公費」との混淆を避けるため、便宜的に「公務費」と訳した。
- (5) 江蘇省人民政府ホームページ（「南京中国第二歴史檔案館首次向公衆開放」[http://www.jiangsu.gov.cn/art/2017/6/12/art\\_53956\\_7450671.html](http://www.jiangsu.gov.cn/art/2017/6/12/art_53956_7450671.html)：二〇二二年七月五日閲覧）。なお、一般公開に先立ち、デジタル化された檔案が二〇一六年十二月二十六日に完成、研究者向けに館内での検索閲覧が可能になっていた。（中国第二歴史檔案館「關於新增開放檔案的通知」[http://www.shacnec.net/ydyx/tzgg/201612/220161226\\_3704.html](http://www.shacnec.net/ydyx/tzgg/201612/220161226_3704.html)：二〇二二年七月五日閲覧）
- (6) 掲載にあたっては予め商学同攻会幹事の先方にお諮りし、寄稿者からは著作権譲渡の了解を書面であたてていることを明記する。
- (7) のち改訂増補して『周作人「対日協力」の顛末…補注「北京苦住庵記」ならびに後日編』として刊行。
- (8) シンポジウムの概要は、彭雨新「首届周作人国際学術研討会——基礎資料の鉤沉与整理：會議側記」（『新文學史料』二〇一九年第一期）、馬嬌嬌「日本首届周作人国際学術研討会紀要」（『魯迅研究月刊』二〇一八年第十期）で紹介されている。シンポジウムで発表された論文の一部は中国国内の研究雑誌に収録されたが、本誌「文化論集」も第五号を「周作人国際シンポジウム」特集号としてを刊行した。
- (9) 「中国大百科全書」（第三版ネットワーク版：<https://www.zgbk.com/>：二〇二二年六月三日閲覧）。
- (10) 南京大学文学院ホームページ（<https://chinju.edu.cn/szdw/xrfs/20190926/t34606.html>：二〇二二年六月三日閲覧）に於て。